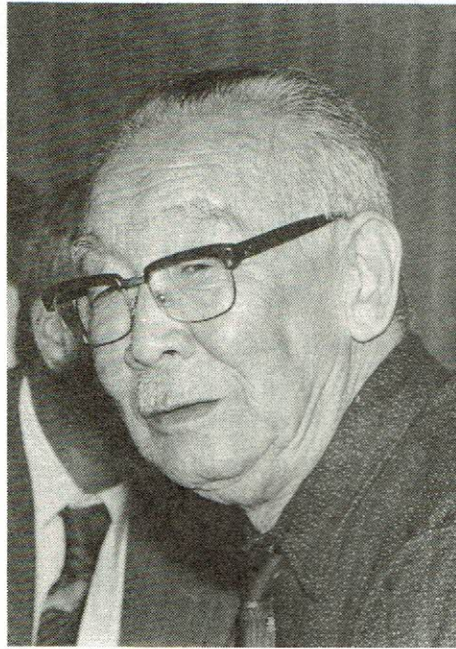


新山協ニュース

△ 発行者 鈴木敏雄 △ 発行所 新潟県山岳協会
〒940 長岡市学校町1-12-23 室賀輝男方 TEL 0258-32-0428

藤島先生逝く

大興安嶺
調査隊出発



藤島玄氏(ふじしま・げん)
登山家、日本山岳会名誉会
員) 9月11日午前7時41分、
腎(じん)不全のため死去。
83歳。

協会副理事長の平田大六を
隊長に、渡辺龍、安藤潔、渡
辺忠次、高橋賢吉(全員関川
村山の会)の5名が、協会40
周年記念事業中国大興安嶺遠
征の、先発調査隊として9月
14日夜出発された。

新潟県と友好関係にある、
中国黒竜江省、中国登山協会
の今年のチョモランマ遠征隊
ら多数の支援を受けて、25日
帰国までの間、来年の本隊派
遣の道しるべを築いて来られ
る予定。

湿原、原生林が広がり、オ
オカミ、シカ、野鳥の宝庫と
言われる、同所の研究は進ん
でいない。楽しみな地域であ
る。

9月25日全員無事帰国され
ました。

藤島名誉会長の逝去を悼んで

新潟県山岳協会会長 室賀輝男

新潟県山岳協会創設功労者
である、名誉会長藤島玄氏は、
高齢に加え、二回にも及んだ
交通事故の後遺症で、軀が不
自由になられ、数年来自宅療
養をつづけられてきましたが、
今年6月末に風邪をこじら
せ、肺炎を併発され、新潟市
様に見とられ、83才で多彩な

内の文京病院に入院治療をつ
づけられた。時折病床を見舞
う岳友の便りに、病状悪化が
伝えられ、密かに心配申し上
げていたところ、昭和63年9
月11日午前7時41分、腎不全
のため、ご息嶺樹、とよ子
として結成され、昭和55年ま
で34年間支部長を勤められ、
その間、県下山岳会の交流を
図るために新潟県山岳協会を
創設され、強力な中央とのパ
リと、越後の山岳衆を一目も

二目も置かされるまでに育て上げた。山の名伯楽であることは、各位の充分にご承知のところである。想えば玄さんの公式の席へのご出席は、80才の声を聞き大変弱られたと云うことで、玄さんを励ます会を昭和60年2月25日、月岡温泉朝日館に御夫妻をお招きして、古い仲間と玄さんの好きな温泉につかり、四方山話をした「春待会」へのご出席が最後で、同年6月15日、長岡市で開催された、日本山岳会創立80周年記念式典にも遂にご出席されず、その後は時折訪ねる岳友を心待ちにされる日々であった。

9月11日は生憎、肌寒秋雨の降る日曜日でしたが、訃報と共に県内外から後輩がはせ参じ、各方面への連絡、準備等々、偉大なる先駆者への最後の手伝を夫々載きました。が、すべて玄さんならではのことでありましょう。

法名 玄山院 正見 と山登り一筋に生きた人にふさわしく、死して尚玄さんと呼ばれる幸せを積んでの冥途への旅立ち、通夜、告別式は県下山岳会はもとより、県内外の山岳関係、知友に囲まれた

玄さんの最後を飾るにふさわしい盛儀でした。山と酒をこよなく愛しつづけた故人を偲び、時間の許す限り酒を飲んで下さいとのサイイ子夫人の御配慮で岳人玄さんならばこそお齊の会場から、第二会場のご自宅へと続き、ニヤニヤ微笑む玄さんの遺影を前に繰り拡げられた。

ご逝去の報せと共に駆けつ

弔

「先生」と私がお呼びできるようになってから40年余りになります。83才になられた今日までの殆どが、山を愛し、山に打ちこみ、新潟県の登山者の育成と登山の振興に心魂を傾けてこられた。藤島先生の人生でありました。

まだまだ長生きをされまして、本県登山界の動きを温かく、また厳しく見守っていた。だきたかった先生のご逝去は、誠に残念の極みであります。

ご家族並びにご親戚皆様のご心中をお察し致しまして、謹んでお悔みを申し上げます。

戦後の昭和31年に、日本山岳会の関西支部に次いで、全

け、種々御手配下された岳友の皆様、本当に皆様の御協力でご進として悔いのない葬式が出来ました。又、心暖まるご弔門、弔電等々賜りました。県内外の皆様は、この場を借りて心より御礼申し上げますと共に、藤島玄さんの心からなる冥福を御祈り申し上げます。

合掌

詞

国で二番目に結成されました。越後支部の、初代支部長として活躍された34年間の、輝やかしい業績の数々は枚挙にいとまありませんが、新潟県山岳協会の創設、敬愛してやまぬ飯豊連峰における第19回新潟国体登山の成功、そして越後支後結成20周年を記念して実施しまして、新潟日報文化賞を受けた新潟県境全縦走踏査登山等によって、本県登山界の結束と向上発展は著しいものがあります。

成果は総て先生の情熱と、卓越した指導力、実行力のしからしむるところでありました。また、先生の豊かなご体験

で裏打ちをされた著書「越後の山旅」や、心血を注いで作成された主要山岳の登山地図シリーズは、県内外を問わず岳人の座右の指針として愛読され、多くの人々が山への憧れと、登山の欲びを啓発されました。

純然たる登山活動に対する叙勲は、わが国の登山界では極めて異例のことでありまして、日本山岳会の名譽会員という、最高の榮譽を受けられましたのも、山ひと筋に生きてこられた先生の、大きな足跡の実証であります。

私個人と致しましては、一生に一度だけだと結婚の媒酌をしていただきまして、奥様ともども、長年に亘ってご厚情を賜ってまいりました。先生のお伴をして歩きました山は、北海道から九州まで数え切れないのですが、そうした登山の実践を通して、親身の教えを受け、大勢の山仲間との交流を与えていただきまして、心から感謝致しております。

先生を慕って集まった多くの人々は、同じように偉大な先蹤者としてそのお人柄に触れ、登山の功德を感得してこ

られたことでありましょう。先生の還曆をお祝いして、最も親しんで登られました飯豊連峰杖差岳の山上に、全国岳人の協賛を得まして、当支部が寿像を建立致しましたが、そこに添えられました銘板の言葉を、先生、もう一度お聞き願います。

「越後の山をこよなく愛し、生きる喜びを山登り一筋にかけて、還曆の翁になった玄さん。幼なごころにかえった無心の笑顔、いま温和な瞳にうつるのは、青く澄んだ地塘か、風雪にけむる50年の足跡か。精神な熊のように越後の山を駆け巡った玄さんの鋭目が、年輪とともに大きく育ち、北の峰にも南の溪にも先蹤者の誇りをちりばめている。そしてこだましてくるのは、若者たちの力強い山靴の音だ。鋭い眼差しがかげり、逞ましい四肢にははずみが失せても、玄さんの耳は山の呼ぶ声をとらえ、その心は、さしのべた山の腕からぬけ出ることにはできない。雲表の岩にゆったりと腰をすえた玄さんは、高嶺の花や赤蜻蛉と語り、霧走る山々に眼を細めることだろう。」

ここに藤島先生のご遺徳を

偲びながら、越後支部の会員一同、心からお礼を申し上げますととともに、安らかな御冥

福をお祈り申し上げます。
日本山岳会越後支部長
佐藤 一栄

70過ぎてヒマラヤへ

藤 島 玄

ヒマラヤに雪はなかった

半面にだけ太陽を受ける長い雲表の飛行。乗り継いでも同じ機内食が唯一の楽しみだが、何か大きな期待と、いささかの不安が漂う。また長い飛行。泊りを重ね、最新大形の長途のバス。やっとヒマラヤの見える処へやってきた。

意外なことに、ヒマラヤの高峰に雪は無かった。というより、私の希望のそれは、雪髷が見たかったのだ。ヒマラヤ髷のない山の連なりが、白昼晴天の空の下に、山越阿弥陀のようにすぽんと立って、幾重にも重なる前山は、耕して山嶺に至る式の段々畑の棚田である。御同行衆は、初めて地方テレビ局に出てマイクを持った若い歌手のように、貧乏ゆすりしてカメラを構え、片端からシャッターをカチャ、

カチャ切っている。

落ち付く処に落ち付いて立つ。夕暮れが訪れた。秒刻みに変るバラ色の美しさ。立ちつくしている、変化に燃える巨大な山越阿弥陀に、身も心も吸い込まれて行く。飛翔自在な雲中供養菩薩のように、近く遠く、高く低く、岩壁と残雪の山を、舐めるように飛んでいる。木をゆるがす風もない。刻一刻と気温の低下だけだ。だんだんと身も心も、燃焼していく。壮麗な美しさが、どう変るか待っている。

天幕の外人たちも出てきて、シャッターチャンスを狙い始めた。炭火を吹き起こして、炬燵へ入れて、やっと足を入れるか、入れぬうちに、俺も入れてくれという奴だ。それはいい。無知からきた物真似だ。それにつられて、ガチャガチャくつわ虫は、こっちの

カメラだ。ああ何をかいわんやだ。写真の色彩効果を知らん無知からの物真似だ。

雪煙も吹かず、雪髷もない、真昼のヒマラヤなど、日本北アルプスと大差なしだ。

ヒマラヤに音はなかった

ヒマラヤの自然と対話のつもりが、あんまり音なしのことで意外であった。聞くのは夜の犬の鳴声と、朝晩の鶏と鳥の啼声だけだ。風の声、雨の音もとうとうしなかった。季節外れの乾期の訪れだ。小鳥の囀りもない、渡り鳥の鳴き声もない。蠅も、蚊も、虻もいない。音を出さぬ蚤、虱すらつかなかった。

しかし、最大最良の人工の音楽があった。ヒマラヤに対して凝然と対している朝な夕べに、ロンロン、リンリンと微妙にして複雑な鐘と鈴の音がしてくる。朝は朝露に地面が濡れているが、夕べは乾いて土煙が立つ。私はこれを糞塵と言いたい。その朝霧、糞塵の中から驟馬のキャラバンが通って行く。10匹前後を一隊として馬子が後尾で追う。3隊5隊と続くのだ。荷をつけた先頭馬は、面繫(おもが

い)の上に幣束のように赤毛か白毛を立て、鼻面に四角な鏡をピカピカ輝かし、喉下に鐘、首筋に鈴を連ねる。一步

一步その複合音が、日本にならぬ響きを送ってくる。心に浸むような深さと、何か心を揺り動かす原始な震動を漂わしてくる。この響きは遠くへ伝

わらない。来たなと、音を心に刻み込んでいるうちに、突然のようにポカッと消える。もう隊商の長い行列がどこへ行ったか、見えないのだ。まるで、映画音楽とそっくりだ。その若い馬子が笛を吹く。ヒマラヤの山谷に相応しい音だ。家恋しか、女房恋しか、無心に吹くその音は、りょうりょうと、心をかきむしるように、うってくる。たれか故郷を思わざるだ。安っぽいその堅笛を、邪魔臭いのに最後まで荷物に突っ込んで持ち帰った老人がいる。私は、その老人の心は、詩人なんだな、と今も思っている。どうせ鳴らないんだらうが。

ヒマラヤの驟馬にのる

飯豊山より低い高度で、高山病になる訳がない。頭痛は無く、食欲は有る。何と言っても胸が苦しくて足が進まず、一行のブレイキになった。そこで驟馬に乗せられる羽目になった。乗ってみると、西部劇のカウボーイのようにいどころか、おっかない一心で、なりふり構わず鞍にしがみつ。落馬が一巻の終りだ。下は芝生なんてもんでない。総てが丸っこい岩石だ。崖へ転落は言うに及ばず千仞の谷だ。担架に乗せられてはたまらない。一行の迷惑計り知れずである。

乗ってみると、横ぶれと、前後ぶれがある。身体の安定に横ぶれ防止だ。昔の宮内省主馬署(しゅめつかさ)のお嬢さんの、ロンドンで乗馬の話をお必死に思い出した。女房は駕籠に乗ったが、馬に乗った話は聞いたことがない。鏡が脚に合わず、非常に窮屈で不自然なのに弱った。子供の馬子はお構いなしに手綱を引張る。言葉が通じない。横ぶれを防ぎ、登り下りは鞍の前後に片手づつかけて摺まりながら、体重を移動した。この分だと垂れた玉はつぶれそうだし、締めた尻は裂けそう。帰りに乗ったが、今度は鞍がないようで、こいつも怖



和58年十月九日、十日、玄山会

わかった。3度目は、長い急坂の岩石道の急登だ。何事も

何もしないヒマラヤ

3度目となれば正念場だ。その道の先輩が鏡も調節したし、馬が登り易い道を判断して、自主的に登るから、馬上豊かに、お嬢さんに乗らなかったよ。うな気がしないではなかった。失礼ご免。

後日談がある。城門をくぐって、真直ぐの道を宮殿へ進んだ。左手を眼鏡のつるへやっつたつもりが、耳を引張る。甘い痺れで、ボタンがかげられない。気がつくくと左脚もぎくしゃく引きずっている。その時は冷汗流して、青くなつた。来るべきものが、来たな。とね。

遊覧飛行をした。真昼間の

ヒマラヤなんかどうでもいいので、どうでもいい席について。雀か鳥のように機内は騒然となった。あの山の名、この山の名、確信あり気に、飛んでいる窓外の山をガヤガヤ

チンプンカンプン。私はそれはそれに任せて、水河が見たかった。鼻を窓につけて見おろせば、雪のないヒマラヤの有難さが解ってきた。初めて見る水河地形が、頭壁から末端の堆石堤で、水河湖。そして、万年雪盆、側堤石堤、アイスフォール等々、なるほど、これがベースキャンプを設ける個処が、もう、天幕の上に国旗を立てるには遅すぎた、としみじみ感じられた。

後半の旅は、観光と買物だ。買う気のない傍観者には、各自が1万円札を引張り出して宝石だ、純金だ、仏像だと眼の色変えて買いまくっているのがおかしい。日本間にしろ、洋室にしろ、どこへ飾るのかと心配になる。

ただ一つ、印度サラサを買う眼の高さには感心した。唯一人衣服部で選択していたのを見たが、その知識がないので黙っていた。

隊長が、私の荷の軽いのを

見て、洋酒と洋モクを入れてくれた。やっぱり、隊長だけ、心のゆとり、というもんがある。有難う。

(ヒマラヤ)

トレッキング報告書

1976・1977より

越後の山の先駆者

日本山岳会越後支部長 佐藤 栄

「巨星墜つ」という言葉がある。新潟県の登山界にとつて、藤島玄(本名源太郎)氏の死去は、まさにそんな思いを抱かせる痛恨事であった。

近代登山の黎明期といわれる大正時代の初めに、新潟市から見える限りの山を登り尽くす夢を抱き、長い年月をかけて念願を果たした同氏は、登山を通じて、山における人間同士の交わりの重みを知ったと語り、登山者の育成と登山団体の交流を図るために、ご自身の人生をささげられた。

昭和2年、日本山岳会へ入会された氏は、強靱な体軀、脚力をもって精力的に全国の山々を巡り歩くとともに、県内各地に山岳会の誕生をうながし、行政面では未開の山々の登山道伐開や、登山施設の整備を呼びかけるなど登山の

振興に尽力し、岳人としての観点から、磐梯朝日国立公園の実現にも奔走した。戦後の昭和21年には、日本山岳会の関西支部に次いで、全国で2番目に結成された越後支部の初代支部長となり、活躍した在任34年間の業績は枚挙にいとまがないが、県下の登山団体を結集した新潟県山岳協会の創設、敬愛してやまめ飯豊連峰における、第19回新潟国体登山の成功、そして支部結成20周年に実施した「新潟県境全縦走踏査登山」では、46団体、571人の岳人を動員し、9カ月間をかけて自然科学、山村民俗、観光開発等の分野で登山との関連を追求した、500ページの報告書を完成して、新潟日報文化賞を受けた。これらは陣頭指揮をされた氏の山に対す

る情熱と、卓越した指導力、実行力の成果であり、同時に本県登山界の結束と向上発展にも大きく貢献した。

藤島氏の半世紀にわたる豊かな体験で裏打ちされた名著「越後の山旅」や、心血を注いで作製した主要山岳の登山地図シリーズは、県内外を問わず、岳人の座右の指針として愛読され、多くの人々が山への憧れと登山の喜びを啓発されたはずである。また氏を慕って集まった人々は、偉大な先駆者に触れ、親身の教えを受けて、登山の功徳を感得したことであろう。私自身もおともをして歩いた40年余りの間に、山の厳しさや奥深さを知らされ、また大勢の山仲間との交流を与えていただいたことを感謝している。

純然たる登山活動に対する叙勲は、わが国の登山界では極めて異例のことであり、日本山岳会の名誉会員という、岳人最高の栄誉を受けたのも山登り一筋に生きてこられた同氏の、大きな足跡の証といえる。

晩年には海外の山にも目を向けて、ヒマラヤ・トレッキングや中国、韓国の山を訪れ

たりされた。80歳の高齢で病床に伏してからも、登山界の動きに心を配り、山仲間を訪問を喜んで童顔をほころばせておられたが、胸中では著作その他、やり残した仕事に対する愛着が渦を巻いていたことであらう。

9月11日、83歳で多彩な生涯を全うされたといえ、越

学者であった藤島玄さん

関川村山の会 平田大六

「登山学」あるいは「山岳学」というものがあるとすれば、藤島さんは、私にとって

後の山男たちは、惜しみても余りあるお方を失った。しかし、飯豊連峰杖差岳の山上に、

たといえば、越後支部でやった「県境全縦走踏査登山」のとき、「それは三角点ではないか、

全国岳人の協賛を得て、越後支部が建立した藤島氏の肖像は、いままも穏やかな笑顔で、

もう一度行ってこい」「名もない花などない、必ず名前があるはずだ」「それはあん

歩き続けた山々の四季の彩りを楽しんでおられることであらう。

と、厳しくご指導いただいたもののである。原稿の書き方にしても、あとで返していた

合掌 (新潟日報より)

達人の一言

長岡ハイキングクラブ 土田幸雄

俗に名人、達人と言われる人の話は、それぞれ一芸に秀でただけあって、なる程と思うことが多いものである。

先生とのお話の中で、物事の神髄を突いたさりげない一言、一言が折々に鮮かに甦り心の糧となっている。

・ 鈍目に喜んで先人の苦勞を忘れるな

・ 上手に燃す人はよく消していく

・ 極寒でも汗が出ているうちには寒くない 等々

無駄がなく簡潔にして要を得た表現は、長い経験、鋭い観察力もさることながら、心豊かなお人柄によるものである。う。けだし、山と人生の達人の格言といっても過言でない。

山のご案内書は数多いが「越後の山旅」に比肩すべきものは見当たらない。古文獻を豊富に取り入れ、歴史、風俗、文化、地質、植物等、森羅万

(9月14日 大興安嶺旅立ちの日)

合掌

象と心にくいばかりのアドバ
イス、中高年登山ブームとや
らで、安易なガイドブック氾
濫の今日、座右の書として読
んで欲しいものである。

古びた玄さんの鋸

さわがに山岳会 小野 健

すでに16年になりますが、
青海町で先生の「登山と人生」
という講演がありました。例
によって、全く飾り気のない
玄山節を聞かされたのですが、
ここで、吹雪のときにキジを

打つとき、外ではしんどいか
ら、テントの中に新聞紙を広
げて包んでポイと……。次に
オレハ山感がいいから暗闇を
無灯で歩いて道を外れるこ
とはないと、自慢げに話して
いました。

講演が終わってから、天狗と
いう料亭で山仲間と慰労会を
やったのです。その時に、オ
テモトの袋にメモして私の前
に置いたのです。

若天狗 酒と肉なる宴なり
梅海の小屋は

雪に白きか
と即興の歌でした。この頃、

「越後の山旅」二冊目も傷
みが目についてきた。新しく
買い置いて先生を偲ぶよすが
としたい。

合 掌

わが会は梅海新道を開通した
ばかりでした。この時も、登
山道伐開について、飯豊の経
験から色々細かいアドバイス
をしてくれたのです。

宴会も終り、わが家で二次
会をやるうとみんなで薄暗い
裏道を通っていきました。先
生が先頭で歩いていたのです
が、いつの間にか見えなくな
ったのです。ところが、暗闇
歩行の達人が家の横にある大
きな測溝に落ちて這い上がる
うとしていたのです。少々酔
っていたのでみんなで引き上
げて家に連れてきました。落
ちた時足首を少し痛めたよう
ですが、本人は平気な顔をし
ているので、さっきの話を思
い出しておかしいやら気の毒
なように困ったものでした。

次の日、やはり足首を痛め

ていたので病院で検診するよ
う話しても、頑として行かな
いのです。4〜5日間、痛み
が消えるまでわが家に滞在し
ていたのですが、全くマイベ
ースで、もっぱら私の室にこ
もって読書をしていました。
カミさん曰く、話が面白く気
を遣うことがないので楽でし
たと。痛みが治まって帰ると
き、「小野君、お陰で随分休
養と勉強ができたよ、奥さん

会津と玄さん

下越山岳会 鈴木 敏 雄

を大事にしろよ。」と……
あの時の笑顔とご霊前の写
真の笑顔が重なって、人の出
合いの恋しさと、それを断と
うとする人生の無情さにいさ
さかやり切れない想いがしま
した。数年前に戴いた飯豊で
愛用されていた鋸を形身とし
て、これからの梅海の藪刈り
に使用しながら、先生の意を
僅かでも継いでいけたらと願
っています。

合 掌

晩秋に磐梯線で玄さんに連
れられ会津入り、山都駅で落
合う予定の会津の衆は姿を見
せない、それもそれ苦、朝の
8時と晩の8時を違えたのだ。
連絡の不手際かと玄さんの苦
笑、勝手知った満天の星空の
もと、山都から川入まで歩く
以外方法はない。

一ノ木着10時、高橋健治
(故人)宅に案内を乞うと、
入道は待ってましたとばかり、
さあアガランショウウの一言、
裏山からワラビを採ってくる
からと台所へ、酒の入った大

野罫が囲炉裏にかかる。飲む
程に入道の自慢話に花が咲き、
目を細める玄さんもついぞ笑
いが止まらない。
そこへ程良く一台の車が玄
関先に止まり、川入からの帰
り亀田の立川さん、良い所へ
来たとはばかり飲み残りの一升
瓶を片手に川入に逆戻り、す
でに11時も廻ってはいるが、
まだ今日の中だと小椋利雄さ
んの家に向う。利雄さんの家
ではすでに朝から会津の衆が、
玄さんを待ちあびて酒宴の最
中に飛び込んだからさあ大変、

玄さん、入道、立川さんに私
と、役者が揃えば改めると、
囲炉裏に車座となって夜の更
けるのも忘れて飲み語る。
寒い夜が明けて一面の霜柱、
早々に御沢の路を地藏山に向
う。会津衆が先導、地藏山か
らわずかで月夜ダケの群、早
速玄さんがその頂を月夜岳と
命名。牛方岩山を過ぎる頃か
ら晩秋の風が肌を感じるが、
白布沢の源頭までの長いこと。
赤崩山でとっぷり日も暮れ泊
場を作り酒盛りとなる。星空
は見事で時々尾を引く流れ星
いや、それは人工衛星だと玄
さんの弁、薪木の回りから一
人消え2人消えて何時しか全
員眠りに就く。
朝6時のスタートが8時と
なり、大塚山までの尾根を敷
を分けて歩く。時々、昭和12
年に初めて入った会津の山の
ことなど話を聞きながら、今
日の泊場となる飯盛山と飯豊
山とのかかわり、男神、女神
の喧嘩がもとで飯豊山へ女神
が逃げたとか、疲れも吹っ飛
ぶ玄さんの講釈、はるか彼方
の飯盛山へ藪の中を歩む。
それでも元気な玄さんの前
になり、後になって夕暮近く
飯盛山の三角点、泊場に火が

入り、酒は有るが魚が無い夜を過し、3日目の朝を迎え暑い草藪の路を熱塩に下る。

丁度20年前の秋のことであったが、玄さんが飯豊の支尾根で歩いたことのない稜線を何時か歩こうと川入から日中熱塩まで3日間、とても信じられない程の元気で一緒に歩いた玄さんが語って下さったこと、すべてが教えであり、つい昨日の事のように想い出される。

時には厳しく、時にはやさ

最後の四つの想い出

日本山岳会越後支部 山崎 幸和

◎ 昭和58年10月9日の会津・本元飯豊山。すこぶるお元気であったものの藤島先生の脚力はもう往年のそれではなかった。おかげと云えば叱られるが、遅れる先生と終始一緒にさせて頂いたのは、関川の平田大六、渡辺竜吉、吉田の早川英夫の各先輩と私で、静かな秋山をゆっくり楽しんで。道すがら聞く飯豊山との係わり、話はまだまだ山への

しく穏やかな笑顔で、敏さん又来週、今度は会津田島から七ツ岳、駒止と歩こうよ、と話した車中の会話が忘れられず、一緒にさせて頂いたことなどただただ感謝し、四季の会津の折々の想い出は玄さんのどこかで、あの気丈な笑顔の玄さんが待っているような感じに打たれるが、今はただ、亡き玄さんを偲び御冥福をお祈りするばかりである。

合掌

強い執念が感じられたが、骨折2回の脚の悪化は如何ともしがたく難儀されたようだ。先生がご自力で登られた山の最後であった。時78歳。◎ そして翌年の7月25日の弥彦山は、不自由な足で碑直近へ車乗入れの高頭祭。この時が生涯最後の山となつてしまわれた。ご自身が建立された碑前で、御神酒をたしなまれるご満悦のお顔には、山へ

の別れが感じられた。時79歳。◎ 四ヶ月後の11月23日、縁あって西堀栄三郎先生をお招き出来、藤島先生にご無理願って弥彦までおいで頂いた。夜遅くまでの山談義に大御機嫌だったが、翌日の弥彦山へは、西堀先生のお誘いにもかかわらず固辞された。当夜は、長年お世話になった万分の一にも足らない細やかなお礼の晩餐会であったが、たどたどしい文字の礼状は私の胸を熱くした。14名の参席者も、先生の宴席での楽しげな歓談姿はこの日が最後となり、数ヶ月後には臥床されたとの報が届いた。

◎ その後、先生との再会は1年後の昭和60年10月26日、会津のJAC高郷山荘だった。遠路会津までご家族の付添いとはいえ、その気力に敬服させられたが、もう酒もたしなまされず、終始無言でうなづくだけの眼は、先生の快気祝に参集した門弟達を嬉しそうに見入っておられた。これが最後のお出ましであった。時80歳。

それから3年、お見舞都度の祈願は神に届かなかった。合掌

幻の飯豊山行と最後の山

新潟鉄工山の会 北村 猛

藤島玄さんには親子二代大変お世話になりました。祭壇に飾られた大きな遺影は、訃報に肩を落し、お通夜に、告別式にと玄さんを敬慕して駆けつけた越後の山仲間一同を正面に迎え、一人一人に「やあ、しばらくだね」と話しかけている様であった。月日の経つのは早いもの、想えば56年9月、玄さんから最後の飯豊山行の話が持ち上った。意向としては、今は亡き立川さんをリーダーに、亀田山岳会2/3人に、新潟鉄工山の会有志7/8人を加えた10名前後で、コースは50年7月第2回玄山会で、全山縦走した際の登りコースだった、足の松尾根から新設されて未だ見た事のない頼母木小屋往復としたいと云うものだった。立川さんの「よし、わかった」の決断で話は本確化し、行動計画の内容についての打ち合わせも進み、日時も10月9日(夜)〜11日と決まった。10

会共催で、上川村の貉ヶ森、御前ヶ遊窟で山行行事が開催された。10月3日初日の貉ヶ森山行を終え、翌日の会場の宿場となる捧目貫へ向う途中、御神楽温泉に立寄り居合わせた玄さん、立川さんと会い、出発と集合場所の最終確認を済ませ、あとは出発を待つばかり。ところが突然、思いもよらぬ事態が起きてしまった。玄さんから4日夜立川さんが倒れた、に続いて7日の計報、とても運命のいたずらでは済まされない出来事だった。当然の事ながら山行予定はこの時点で中止となり、玄さん共々正に幻の飯豊山行となってしまう。晩年玄さんの山行には必らずと云って良い位同行し、力になってくれた立川さんを失った衝撃はさすがに大きく、胸中の無念は我々の想像をはるかに越えるものがあつたと思われる。「これで飯豊も一貫の終り、きっぱり諦めたわい」と、私

に静かに語りかける様に繰り返されたあの時の玄さんの言葉は、大変印象的で今でも記憶に新しい。

爾来飯豊山には再び足を踏み入れる事もなく、その後の山では58年第10回玄山会で、

「箸」

むささび会

足も大部弱くなったので、好きな弥彦山に登っておきたい、という玄さんの一言で、小早川さんと早春の弥彦山に同行することが決まった。御神水清水の所を、登山者が気持ち良く飲めるように、と清掃する先生の弥彦山を敬愛する姿に感動し、同行できた喜びを感じるのだった。

山頂御廟所での昼食のとき、先生の箸が変っているのに気付き、それが何んのためか知ったとき改めて先生の偉大さを感じたのであった。その箸は細紐で結ばれた割箸であった。どこにでもありふれた割箸であるが、もう何回かの山行に同行したと一目で判る程に変色している。その

関川村山の会の平田大六さん、渡辺龍吉さん等に付き添われ、執念で美事峰越えした会津の本元飯豊山が最後の山となつてしまった。玄さんの御冥福を心から祈り申し上げます。合掌

遠藤 家之進正和

の上、紛失しないようにこのことからか結んであるのだ。たかが割箸ぐらいと使い捨てしているのに、山行毎に大事に使用する先生に感動し、ゆっくりとおいしそうに食べていた先生を鮮明に思い出す。先生は講演、著書の中で、山の装備は新品で、品質の良

藤島さんを偲ぶ

峡彩山岳会

坂井

厚

昭和21年晩秋、赤谷陣場山で下越山岳会の観月会が催された。誘われて参加しましたが、やがて田中市松老に付いた偉丈夫な方が藤島玄さんで

いものを使いこなせなければならぬと常に言っていた。その先生が普段何げなく使い捨てしてしまう割箸を大事に使用する姿を見たとき、敬服するとともに自戒の念にかられるのであった。

陽春の暖かい陽差しの中、ゆっくりとした足取りで登りながら、急いで登らなくともよい時は周囲の「もの」を良く見て登ることだ、と教えてくれる先生の一言一言を聞き洩らさないよう傾聴し、弥彦山の一日を楽しんだのであった。

先生と知り合えて短かい間であったが、教えていただいたことを生かし得る山行を重ねてゆきたいと思っている。先生の御冥福を祈ります。合掌

私、杖差岳に魅せられて

麓に入り始めた頃、親切な助言（大石に高橋千代吉さんが居られること等）と激励を戴き、勇躍杖差通いを始めることができました（昭和30年）。昭和33年8月、大石青年団員5名（リーダー、高橋千代吉さん）に、藤島さん、水野善一郎さんと私が同行し、大石から飯豊縦走になった際、お西の草原で幕営しましたが、翌早朝本山参りに出発した青年らは、出立後暫くでザック、そのあとで遭難一手前の青年らに遭いました。その方達は、私らの焚火の煙や火を見付けず、途

中での断念し、野宿をせざるを得なかつたこと（夜半より小雨）を話しておりました。このように幕営地選択の適確さには、ただ感服した次第です。その文章の確かさ（昭和18年

「越後の山旅」の飯豊連峰部の執筆を受け持った際、最初に書いた杖差岳部分の原稿を持って、藤島さんを訪問し教えを乞いましたが、その時森谷さんに会いたい。会っていろいろ話を聞きたいし、教えを乞いたいこと話されました（昭和54年12月）。両氏とも、それぞれ独自の風格を持っておられた方なので、すぐ

と

というわけにもゆかず、都合もあって延び延びになっておりましたところ、57年7月上旬、その出版記念会の席上、今度は森谷さんから、玄さんはどうしている、元氣か。と尋ねられました。あまり良くないですと答えたところ、見舞に行こうか、と話されました。その後先輩諸氏に打診したところ、会わない方がよいだろうとの助言をいただき、お断り申し上げましたがそれぞれお年を召されて昔日を懐しむような申し様に、またない機会を失ったことを今もって残念に思っているところ

です。若き日、降り続く雨の中に沈着冷静、忍耐と邁進で旬日余に亘る山行をなし、そして、その文章の確かさ（昭和18年9月1日発行「山と溪谷」第81号、飯豊山 頼母木川（昭和9年7月山行）は、私達後輩をして奮起せしめるに充分なものがあります。

私の青春をかけた杖差岳の草原に、微笑をたたえた玄翁碑は、本山を眺めつつ登山界の行末を見守ってくれるものと信じています。藤島さん、さようなら。合掌

合掌

近くて、遠い人

ピオレの会 三 富 一 弥

藤島先生のお宅から、私の家迄約200メートル位の近さであるが、日本山岳会に入会して始めてお逢いした。

入会の申込み、紹介のお願いで先生のお宅の2階に上ったら、部屋の四方の壁に本棚があつて、本がびっしりと詰まっていたのにびっくりした。天井には各地の山開き等の記念の手拭が隙間なく貼りめぐらされていた。中央に小さな机があつて、その脇にガスコンロを置いて、一斗缶位のゴミ入れがあつた。

私の入会を気持よく受けていただき、その後何かにつけて、呼んでいただき、沢山の山の知人を知り得る事ができた。山の話を書きたくなると、手酒をもつてよく遊びにいき山の知識を数多く聞かせてもらった。

国土地理院から各地の二万五千分の一の地図が発行されると、五頭山域の6面のうち4面だけをつないで持って来られ、五頭の集成図を発行し

生の所に持って行ったが、他に回つてから足が遠のき、ずっとご無沙汰してしまつた。近くて遠い人が、はるか遠くに逝つてしまつた。

こんな近くに住んでいて恵まれていたのに、もっともって先生から色々な事を教わつておけばよかつたと後悔の念が走る。残念に思う。でも、先生にお逢いして数多くの教訓を身に付ける事ができて感謝しています。

先生の御冥福をお祈りします。 合 掌

おせわになり ました玄先生

むささび会 加藤 明文

「身内（日本山岳会）のめんどろさえも見切れないのに、他者の事なんてどうなつてもオレの知らん事だ。オマエサンをゴミだとは云わんが、オレにとつては他の事はゴミに等しいんだ」

私が最初に交した言葉であつた。「オマエサンとむささび会

は、新潟県の一等三角点をやつたと聞かされたか？ 名立山とか高場山をしてブナケ平など知っているか？ 行つたと云う何かあるか？」

後日、当会の一等三角点特集号を持参した。一見した玄先生、「確かに行ったのは判つた。アハハハ……それにしてもこの内容は……」「アンタの会も珍しい会だな、まあ新潟県にこうゆう会の一つ位あつた方がいいな。今、お金（日本山岳会入会金）持っているか……」

それからは実に親切に、山のあれこれを教えて下された先生であつた。そしてこの頃、「私の頭では身内のめんどろさえ見切れないのに、他の事なんてどうでもいい、ほつておけ」……と、とうとう云つてしまつた。

遺稿がかなりあると聞く。越後の山のバイオニアの気概にふれるためにも、一日も早く纏められることを望む者の一人である。 合 掌

藤島 先生

越後山岳会 山田 智子

玄先生のこと

悠峰山の会 田 中 純 夫

「越後の山旅」のあとがきに、幼ない頃の玄さんが父の寝物語に「いっち遠くて、白いらい山」飯豊山に無限の浪漫をかき立てられた話が出てゐる。我々越後に生まれ、越後の山をその道場として育つてきた山ヤさんにとつては、非常によく理解出来る感情だと思ふ。越後の山の大先達と言つて間違いない。

玄さんには日本山岳会に入会させて戴いた。そして会費を納めに何度かあの2階の部屋にお邪魔した。冷酒を飲みながらいろいろのお話を伺つたことが懐しく思い起こされる。昭和39年6月2日、朝、新潟駅3番線ホームで、鉄柱に凭れている中年の男性――私は5番線ホームからご尊顔を拝していた。第19回の飯豊連峰で開催された団体に参加

する婚約者を見送った日のこと、私には玄先生との出会いになった場面である。先生はホームを間違われていて、誰かが迎えに走って行かれたのを良く憶えている。あの日から24年が過ぎていく。この間、数えるほどしかお目にかかる機会がなかったが、2度手を伸ばせば何んにも届きそうな書斎でお話させて頂いたことは、大切な思い出である。また手紙の返事を細目に書いて下さったことを、いつも恐縮していたものであった。

藤島先生を偲ぶ

峡彩山岳会
筑木 力

藤島先生、もっと長生きして我々後進を指導していただきたかったのに、残念至極。

あの体格のように、偉大な方の思い出を語るなど私には大それたことであるが、盟主飯豊のように、多くの岳人の象徴として、移り変わる登山界の動向を天空高く見守っていただきたいものである。

合掌

偉大なる

山のかたみ

津南山岳会

桑原 悌 治

はかりしれぬ、山と人との出会い、自然の中にずっばりとほまりこんだ、玄さん。

輝やく業績をきざみ、つきぬ思い出を遺し、生涯を閉じられた。惜別の思い限りなし。この偉大な遺産の炎、永劫に燃し続けたい。合掌

私は先生から山のご指導を受けて30年、特に新潟国体山岳競技の準備の頃から、お会いする機会がふえた。

藤島先生

むささび会
加藤 記代子

当時私は高校山岳部の顧問をや、県高体連登山部の運営にも関与していたが、先生のお勤めで県山岳協会や日本山岳会越後支部にも加入し、広く社会人の岳兄ともかかわりあうようになった。

先生は特に飯豊連峰の開拓に努められた。また精魂の結晶ともいえる「越後の山旅」と主要山岳の登山地図は、我々岳人の聖典となっている。さらに登山界の企画者、組織者として、日本山岳会越後支

部の結成、飯豊国体山岳競技の成功、県山岳協会結成への寄与、県境全縦走踏査登山の達成などの業績をも残された。20年以上も昔になるが、酒席の山談議で私は些か酔いも手伝って、たまたま大先輩に反発したことがあった。先生は生意気な若造をいつの間にか包み込んでしまわれた。個性が強く包容力も大きかった。まさに飯豊連峰のような存在であった。

藤島先生とのお付き合い

峡彩山岳会
本 望 英 紀

藤島先生との最初のお付き合いは、学生書房の井口さんが日頃から言っていた、自動車紀行のお盆興業だったかもしれない。それは新発田の五十嵐篤雄、杉原八百樹氏等、井口、藤島玄先生らと計8名、2台の車に分乗し、1台は新車のトヨタ車、1台は廃車寸前のファミリアで、井口さんと奥さんに見送られて出発したが、マツダの車が年のせいか思うにまかせず、調子が悪く早々に近くの修理工場へ寄り見てもらう。どうもポイントらしいとの事、調整してもらった。その親父は、琵琶湖迄行くと聞いて2度ビックリ。カリナは日本一周出来るが、このマツダは新潟市内も抜けらんねえと言う。篤さん曰く、

驚いたことに先生の部屋へ通されると居場所のないほどの書籍の山である。三方の本棚の前にも並べられ、雑然としている。どこに何が有るのかわからなくなっているのではないかと、と思われるのであるが、どこの列の何冊目に何

があるかを覚えていて、必要な資料がすぐに出てくるからまったく不思議である。この山積みの資料を吸収され、知恵袋を身につけられ、こつこつと歩き、あの「越後の山旅」を作成されたことであろう。いつもその本を拝読させていただいては、山旅を楽しませていただいております。合掌

なに、大丈夫、今新発田から新潟迄来たんだから、とパイプを口に涼しい顔で言う。再び走行するが調子が悪く、関屋分水脇のマツダの修理工場へ直行し、再びポイントを見てもらう。こんどはポイントを取り替え、どうやら大丈夫らしい。一路、北陸路目指して出発する。

この時のマツダの車を玄さん曰く、ポイント号と命名し、あの穏やかな目を細めて笑っていた柔和な顔が今も目に浮かぶ。その頃はまだお元気で、人の手も借りず歩いておられた。

その他は、弥彦山や山麓の神社仏閣巡り、津川の西山日光寺等、お供ながら先生と一緒に、緒の機会に多数恵まれた。

又、青海の小野健さんの案内で、フォッサ・マグナ探訪時は、先生と高橋庄一氏と3人で糸魚川で露天風呂に入り、先生と一緒に入浴写真を撮らせてもらった。その折、先生から、世話になったからと封筒を差し出され、受け取って中身を見ると、5千円札が2枚。なんだね、先生これは。まあ、いいから取っておけて言う。2人で顔を見合わせていたが、高橋さんが、玄さんの気の変らん内に貰っておけると言って、先生いただきましたと、押し載せてポケットへ。後で高橋さんと2人で、先生から物を貰う人は多数いても、俺達みたいに、金を貰うのは、後にも先にも初めてで、最後かもしれない。もちろんその後、自宅に伺った時は、それ以上の礼を尽した事は言う迄もない。

先生は先生の書齋に訪れては高橋氏とカメラで数多くのスナップを撮らしてもらった。先生には、いつか、藤島玄さんの百態と言いつつ、写真を撮り続けるからと言ったら、黙ってニコニコしておられた。第10回の玄山会は会津の分元飯豊山の麓の旧関川村の分校で行なわれ、その席で披露された、掛物を見て驚いた。なぜならば、ポロポロに破れてはいるが、中央には飯豊山、右に金指両大日大聖天大権現、左に御西大権現、その他30の神仏混合が書かれており、無中になってシャッターを切った。製作年代の記入はないが、江戸末期の作と考えられる。翌日の本元飯豊山の登山口にある飯豊山碑は等身大の堂々の安政2年の記入があった。この玄山会での、飯豊山碑に刺激されて、まだだれもやってはいない、飯豊山碑をカメラに写して見ようと、それには只、飯豊山ではなく、飯豊山に生涯の情熱をかたむけた、藤島先生を飯豊山と見立て、会津、山形、越後3県にある飯豊山碑の写真を山仲間披露した。幸いにも藤島先生にも、見て戴く機会に恵まれた。先生は黙って見ていたが、まだ未完成の事でもあり、いざ越後での飯豊山信仰的を絞り、飯豊山の顔として、まとめるつもりでいる。それは敬愛してやまない、藤島玄先生への、私の小さな贈り物としたい。

藤島玄先生を偲ぶ

映彩山岳会 上村 幹 雄

「ちょっと待ってくださいよ……」「そうとすると……」「まあね……」先生のお言葉の端々によく出る特徴ある言葉である。

先生は、当り前のように世の中が思っていたり、こちらがただ何の気なしに常識と思っている事でも、必ず先生自身「思考の篩(ふるい)」に、「経験の篩」にかけられまして、いい加減に納得したり妥協をされない、自分の眼でしっかり見据えて、真を見極めて読み通してから語られる。それが、「ちょっと待ってくださいよ……」という表現となる。先生のお宅で話している時、職場のことであつたが、「人の長たる者は、決して、その場で即談するような言葉を吐いてはならない、ゆっくり考え、時間をもって、数日してから意見を言うとか断を下すようにしなければならぬ」と言われた。「どう攻めていくかもね」とも加えられた。先生のお考えは時と

して、突っ拍子もない独断に聞こえたり、毒舌に響く時もあったりしたが、よく考えて見ると、ちゃんと、理論と経験に裏打ちされていて、独創的であつても、しっかり芯を持ち、将来に繋がる見識ある意見としての権威をもっていた。山では、沢の徒渉の時にそれが出た。「ちょっと待って下さいよ」、先生が最も警戒する沢渡りである。右に左に、上流下流、そして高みへ登られて、ここしか無いと決断されるまで、慎重の上に慎重に観察検討して後に動かされた。あの精悍な先生がと、びっくりする程であつた。沢を徒渉する時、いつも先生のそうした態度とお姿を思い出し、見習っているつもりだし、仲間にも自戒してもらっているのは、私だけではあるまい。

こうした思考過程の中で、「そうだとすると……」「だとすると……」と論法が展開していく。御自身は時間を掛けて十分、理論構成したもの

を、他人に納得させていく段階での三段論法である。御自身でも、いま一度、確かめ確かめ反すうするように論を押し進めていられる。もうこの時は自信に満ち力が加わっている。私は何事にも、好奇心と鋭い目を向けて、時に疑いの目をも向けて、「自分の篩」に必ずかけて物を観察し、言を吐けば、人を納得させずにおかぬ説得力のある卓越した指導者、親分としての資質としてかくなければと学んだ。

「まあね」これは、内心、先生があまり気にいらぬ時の一時の言葉だ。さらに、読けて話して行けば、黙ってしまわれ、時には思わぬ時、数カ月も経てバチッとやられる事もある。黙っておられても、好加減にはしておられなかったのだと後で解る。映彩の山小屋を建てた時は、最初のスタートは、この「まあね」が多かった。「お前ら本当にやれるか」「おれは、後始末御免だぜ」と思われていたように、信用されていないのが残念だったが、「まあね」「まあね」が「やるなら、これは山登りでない、一つの企業た、事務的手腕、能力だ」と示唆

も与えてくださり、陰で本当
に暖かく見守り、心配もされ
ている先生の親心に触れ、力
づけられたことを思い出す。

先生がご自宅に居られ、2
階に仕事をされている時や、
2人でお話している時は、年
令も親子の差もあり、冗談を
交わし合うと言う訳にもいか
ず、ついついかしこまって聞
いたり、硬い話、山の情報・
注意といったことになるのだ
が、下に奥様とくつろいで居
られる時は、全く別の雰囲気
となる。先生は届託なく、に
やにやと微笑まれたり、げら
げらと声を出して笑われたり、
大いに、また大変な賑いにも
なる。奥様の勧め上手なお酒
についつい乗せられてしまっ
て、歌うやら踊るやらとなり、
無礼講の上なしとなっていし
まう。先生の御家庭全体が暖
かな下町の気風の中に、分け
隔てないスキンシップを作っ
てしまうのだ。ここに来ると
皆、先生とサイ子奥様の子供
になり、孫になってしまふの
だ。こんな時の先生が、僕は
一番好きだった。庶民的な玄
さんだからだ。だから、先生
は誰からも「玄さん」「玄さ
ん」と親しみをもって呼ばれ、

大勢が集まってくるのだ。
「子分のいない、ツーと言え
ばカーの兵隊を持たないリー
ダーはリーダーではない」と
玄さんはよく言われていたが、
これだからこそ、全国に他県
を凌駕する越後支部を築き、
里見八犬士どころか、さら星
の如く県下に優れた配下岳人
を産み出し、県境全踏査縦走
の偉業を成し遂げたのだ。厳
しくも明るい、暖ったかい、
そして奥様をとっても愛して
おられる先生にいつも甘えた
私であった。

下の座敷ではカルメンを歌
うと言って、闘牛士でなく闘
牛士に撃たれる牛になって、
部屋中駆けずり回って、踊り
まくった。理論好きの渋い顔
の息子さんの嶺樹君まで一緒
になって、「月の砂漠」のラ
クダになって踊った。玄さん
は旧制新潟高校の「生誕ここ
に」の寮歌が大好きだった。
奥様も好きだった。私と奥様
と大きな声で体を振るって歌
っている、小さい声で嬉し
そうに一緒に和して歌われた。
2回も交通事故で足を折られ
て寝込まれた時は、僕も一生
懸命、陽気になって怪しい艶
歌の替歌「東京音頭」も歌っ

て、お見舞いした。
先生と言ったり、他の人の
前では「玄さん」と失礼も顧
みず大先輩をお呼びしたりも
した。私の藤島玄さんは、今、
私の心の中に、いっぱい思い
い出とお教えをもって、今も
そのまま、僕を見守ったり、
励ましてくれていきます。
* 偵察に出たら30分ぐらいで帰
ってくる奴は問題にならない。
最低1時間は見ておきなさい。
(翌朝のため)
* 山に登って下る時は、時々、
後ろを振り返って、じっくり
見なさい。
* 山に行く時帰る時、運転手に
任せて、すぐぐうぐう寝る奴
はグズだー先生は必ず助手
席に乗られ、周りの風物を語
られたり、沢山、丁寧、いろ
いろと話されたり、神社仏
閣に寄られて、知識を授けら
れたり、気を細かく配って下
さった。
* アイガーの壁を登攀して下っ
て来た栄誉ある登山者を胴上
げしているテレビを見て、
「あんな何日も糞を垂れっぱ
なしの者を天井に上げて、糞
の粉が舞っているのも分から
ずにね」はおかしかった。
* 初めに飯豊の厳しい沢に入っ
た時、行く前にお訪ねして御
注意をお願いしたら、「君が
リーダーなら、君が行こうと
言ったら行く、君が引き返そ

うと言ったら引き返す、そう
いう仲間であればいい。なま
じ技術なんて持っている奴は
用事ないよ」とパーティのあ
り方を学んだ。
* 集落に泊まったら、次も同じ
家に行け、あっちの家、こっ
ちの家と行くな、お互い反目
しあっている場合もあり礼儀
を欠くことになる。
* 山道は丁寧にとどれ、ちょっ
とぐらいいと、道を外して歩
く、しっかり見よ、5メート
ルでもだ。
* どんな小さな山でもいい。自
分の持ち山を持って、それが越
後の岳人だし、君を育ててく
れる。

* お酒を飲むとすぐ大声を張り
上げるのは程度の低い人間だ。
* 無駄なことはいっばいやって
おきなさい。きつと後では役
に立つ。嘘を言うなら誠心誠
意嘘をつけ。
まだまだあるが、思い付く
まま列記した。先生がお体が
悪くなって、気にかけておら
れた支部の会誌「越後山岳」
7号は曲りなりにも、編集発
刊出来た。私の山旅の記録も
枕元にお届け出来て、とても
喜んで頂けた。
西山日光寺物語は、万分の
一の御恩返しと思つてやって
見た。もう先生の前で踊り歌
えぬのは何とも寂しい。

第8回
自然保護研究会
報告
案内

計報
国体委員長、吉野良介
氏(49歳、テラシネ山の
会)が去る10月5日、病
気療養中のところ亡くな
られました。ここに謹ん
でご冥福をお祈り申し上
げます。

縮切	0258-3211621
10月29日迄	
電話	
堀井浩宛	
申込	長岡市末広1-4-134
会費	3000円 3食付
装備	寝袋・秋山日帰り装備
講師	村山敏先生
内容	県立新潟向陽高校
講師	カモシカの生態
集合	5日午後5時
会場	自然教育センター
日期	11月5日(土)
11月6日(日)	
会場	南蒲原郡下田村八木前 笠堀ダム・光明山周辺
集合	自然教育センター
内容	5日午後5時
講師	カモシカの生態
講師	県立新潟向陽高校
講師	村山敏先生
装備	寝袋・秋山日帰り装備
会費	3000円 3食付
申込	長岡市末広1-4-134
電話	堀井浩宛